建設時評

新しい価値

東北大学 災害科学国際研究所
准教授 平野勝也

COVID-19が世界を席巻している。日本では，２月に雲行きが怪しくなり，３月だけで一気に緊迫感が増した。欧米の状況変化はもっと凄まじかった。２月は対岸の火事扱いだったにもかかわらず３月だけで外出禁止令や都市封鎖をせざるを得ない状況にまで感染が拡がってしまった。拙稿執筆時点の３月末においては，この号が出る５月の状況は全く予断を許さない緊迫した状態にある。

各国政府は感染拡大による社会的損失と，それに伴う経済縮小による社会的損失をどちらも少なくすると言う綱渡りのような舵取りを迫られている。大規模イベントや集会の自粛を要請すると，社会全体の感染リスクは低減される。しかし，イベント主催者は期待していた収入を得られないどころか会場のキャンセル費用などが，ただ赤字として積み上がる。３月末の報道によれば，各種の自粛が影響し主要公共交通機関の乗客すなわち売り上げが半減しているとのこと。このように感染拡大の抑止と経済縮小の抑止は直接トレードオフの関係にあるわけではないが，密接に反対方向へ連動してしまう。その中での様々な意思決定は相当に厳しいものであろう。感染抑止策を強化すると，経済的な悲鳴があがる。感染抑止策を緩和すると，今度はウイルス拡大に対して糾弾される。どう舵を切っても批判されることは間違いない状況である。欧米では国民に行動抑制を求めた上で給付を行おうとする「両立」が打ち出され，日本でも検討が始まっている。

＊　＊　＊

感染症疫学も経済学も専門ではないので，COVID-19の話はこれくらいにしておくが，土木屋として感じるのは，実は，公共事業もまちづくりも同じ「綱渡りのような舵取り」をする構造を持っていると言うことだ。いや，土木屋に限らず全ての仕事や，ひょっとしたら人生そのものもそうした「綱渡りのような舵取り」の連続なのかもしれない。もちろん，公共事業やまちづくりには感染症対策のような切迫性はない。しかし，その一方で，社会基盤施設の寿命の長さを考えれば，50年100年の責任を伴うのである。地方の利便性を高め経済活性化を図ろうと，交通施設整備を行った結果，短期的には活性化につながっても中長期的にはストロー効果が発生し，地域の人口減少を加速することもある。災害リスクを低減するために，施設整備を進める。その結果，豊かな自然環境を失ったり，観光資源としての価値が低減されてしまったりする。どこかで見た光景である。

＊　＊　＊

2020年３月11日。あれから，９年がすぎた。宮城は１名だけクルーズ船からの下船者の感染が確認されただけで，岩手はゼロであったこともあり，自分が手伝い続けている各地の「その日」の佇まいをみようと，石巻，女川そして高田松原津波復興祈念公園まで足を伸ばした。14時46分は女川で迎えた。追悼式はイベントの自粛要請に従い実施されず，自由献花の方式が採られていた。犠牲となられた方のお名前が刻まれた慰霊碑の前で黙祷することは憚られたので，２月29日に完工したばかりの震災遺構旧女川交番でその時を迎えた。

この震災遺構整備は女川町らしい素晴らしい整備になったと，お手伝いをしている身ゆえの手前味噌ながらも思っている。一つは中学生（当時）の活躍である。多くの津波被災自治体で震災遺構の保存については，「見るのが辛い」と言う声と，「伝承のために残すべき」と言う声に二分されて暗礁に乗り上げてしまうことがしばしばあった。女川では当時の中学生たちが，寄付を集めて「いのちの石碑」を建立するなど様々な活動を展開し，

大人たちを復興へと大いに奮い立たせるとともに，原爆ドームの保存の経緯を調べ，震災遺構の保存を町長に直接提言し，それが実現したのである。９年が経ちすっかりいい若者になった彼らの完工式での挨拶は本当に胸を打つものだった。

中学生が頑張り，その声が首長に届く。これだけでも十分に女川らしいと思えるのだが，実は，この震災遺構に関する女川らしさはもう一つある。女川町の復興まちづくりは，震災直後に住民だけで立ち上げられた復興連絡協議会が復興の方向性を明確に打ち出したのを筆頭に，住民参加というよりも住民主導で進んできたと言って過言ではない。復興まちづくりのデザインについては住民らで構成される「まちづくりワーキンググループ」が様々なデザインの方針を打ち出してくれた。女川町の復興まちづくりにおいて，漁港周辺の海沿いの空間が生命線であるとして「口説ける水辺」を作ってくれと明確な方針を打ち出してくれたのも，この「まちづくりワーキンググループ」である。そのワークショップの中で，参加者から旧女川交番を巡ってこんな趣旨の発言があった。

震災遺構は悲しいことを伝える伝承だけではなく，そこから立ち上がってきた人々の前向きな姿勢も伝えたい。女川はあちこちで嵩上げがされ，震災当時の地盤はこの遺構周辺しか残ってない。そこからぐるっと復興後の地盤まで上がってくる園路を作って復興の姿も伝えたい。そうしたら，将来，仕事とかで落ち込んだ人がやってきて，「こんな状態から昔の人は立ち上がったんだ。僕ももう一度頑張ろうという」勇気をもらえる場所になるのではないか？

衝撃だった。眼から鱗というのはまさにこういうことを言うのだろうと思った。専門家としては恥ずかしながら，「震災遺構」の固定観念に囚われていた。脱帽である。既存の価値に，こうやって新しい価値を足していくことが出来ると言うことを，その方に具体例を持って教えていただいたのだ。感謝しかない。そして，このアイディアをそのままデザインとして都市設計家の小野寺康さんを中心に「形」として仕上げ，公民連携して復興の様子を伝えるパネルを作り上げたのが，今の震災遺構旧女川町交番なのである。

余談ではあるが，そんなこともあり，14時46分は震災当時の地盤に一番近い園路のスタート部分つまりは復興の「原点」で迎えようと思ったのである。黙祷が終わり目を開けると，震災遺構周りで黙祷をしていたのは筆者のみだった。皆は，思い思いに海に向かって黙祷を捧げていた。津波の犠牲者への黙祷は海に向かってすると言うのがいかに自然なことなのかを目の当たりにして嬉しく思った。なぜなら，その後向かった高田松原津波復興祈念公園はそれを信じて，海に向かう祈りの軸がデザインの中心を担っているからである。

＊　＊　＊

東日本大震災の津波被害からの復興はようやくゴールが見え，終わりが近づいている。道すがら見えた様々な復興の「結果」としての風景を見るにつけ，やはり土木技術者が様々なことをいかに「両立」させるのかがとても重要であることに気づかされる。たとえそれがその土木構造物に与えられた役割とは違うことまでの「両立」であったとしてもだ。2019年12月号の小欄で，防災力を高めるために必要だとした「統合戦略」と同義である。

それと同時にそしてひょっとしたらそれ以上に，震災遺構旧女川交番のように「新しい価値」を付け加えていくことがとても大切なのではないか。街路の空間再編を伴うリノベーションと活用，道路網の再編，河川空間の活用，土木遺産の活用など，これからのまちづくりに必要な様々なプロジェクトは，考えてみたらすべからく「新しい価値」を付け加えなければ取り組む意味が弱まるプロジェクトとなることに改めて気づかされる。そう言う時代になってきたのだ。

筆者は大学でデザインは様々な要請が「両立」するように「解くもの」と教えているような気がするが，これからの時代は「解く」だけではなく，「新しい価値」を生み出していかなければならない。そんなことを銘記しながら，わずかに残るしかし重要な最後の仕上げに取り組もうと強く思えた３月11日であった。